平成２５年度業務計画書

１．業務の題目

基礎調査「新しい科学コミュニケーションの探索」

２．担当フェロー

佐倉　統
内田　麻理香（アソシエイトフェロー）

３．業務の目的（２年間）

ここ 10 年で科学コミュニケーション活動が活発になり、その主体や形態の多様さが増している。科学カフェなど研究者と社会の距離を近づける試みが定着し、大型研究プロジェクトにアウトリーチ活動が義務づけられるようになるなど、一定の成果はあげてきたといえる。しかしその一方で、科学技術系のコミュニケーション・イベントの参加者の多くが「科学技術に関心が高い」「文化資質が豊富」な人たちにしか届いていないという指摘や、科学コミュニケーション活動の目指す方向が明確でないという批判などもなされている。

これらの経緯と現状を踏まえ、当研究では科学コミュニケーション概念の整理と枠組みの再検討をおこない、科学知と社会知の接する領域における活動を、新たな科学コミュニケーションの様態として位置づけ直し、これからの科学コミュニケーションのあり方を提示することを目標とする。

この目的を実現するため、これまでの科学コミュニケーションの経緯、社会における科学技術の位置づけを再考し、「伝える」科学コミュニケーション、「つくる」科学コミュニケーションという枠組みでは取りこぼされて今までの科学コミュニケーションでは注目されてこなかった分野に焦点をあて、科学技術の興味の潜在層に向けた、より有効な科学コミュニケーションの領域と手法を探る。これらの分野が科学をどのように取り入れ、使いこなしているかを探ることで、「科学知」や「経験知」にもあてはまらない「新たな知」のありようを浮き彫りにし、それらの知見を科学コミュニケーション全体に還元することが可能となるだろう。

４．当該年度における成果の目標及び業務の方法

①科学コミュニケーションの概念整理と枠組みの展望

平成24年度はセンターの各フェローらへのインタビューを中心に、日本における科学コミュニケーションの現状を整理した。科学への距離感と対象課題の粒度における多様性が科学コミュニケーションの多様性の原因ではないかというのがそのおおよその成果であるが、今年度はその結果の分析をさらに進め、現状分析と将来展望により有意義な見取り図の作成をおこなう。インタビューの動画は順次公開の予定。

また、今年度得られた成果を踏まえ、対象者をさらに広げて、多様な参加者による研究会を何回か開催し、その場をグループ・インタビューのようにすることで、多様な領域からの意見を吸い上げることを試みる。

②新しい科学コミュニケーションの具体的なトピックの探索と調査

平成24年度の成果は、料理やファッション、アート、映像など、科学技術とは異なる分野で創造性を発揮する諸活動が、当該分野での水準の高さを保ちつつ、科学コミュニケーションのタネとなる要素を含んでいる可能性に注目することが、今後の科学コミュニケーション活動にとって重要であるという展望であった。この可能性をさらに具体的な活動としていくために、引き続き、科学技術とは異なる諸分野における注目すべき活動に潜む科学コミュニケーション的要素の抽出作業を進

める。
　同時に、科学知と社会知の界面を探るためのネットワークづくりを促進する。その一環として、アソシエイトフェローの内田麻理香が日常生活から生まれる疑問を科学知と接続することを、「家庭科学総合研究所（カソウケン）」という架空の研究所の形態で長年展開してきたが、この活動の実地展開もおこなう。「カソウケン」の人員を募集し、日常生活の疑問を集め、回答を出す一連の過程をインターネット上で実施することを想定しているが、まずはそのプラットフォームを作り上げる。